

金沢

かわら版

2

尾張町にせ通りで

いつも商売させてもらっていることへの、商人の恩義の厚さを感じさせる。

ところで商売は、自分の才覚でお客様の喜ぶものを読み取り、世に先駆ける気風のもの。

だが、人の気持ちを読み取ると読み間違ふのでは大きな差がある。下手をすれば、身代にも響きかねない。

いわば、人知を超えた部分もあるだけに、なほさらに商人は、自分を越えた大きなものへの態度は敬虔なものとなる。毎朝、手を合わせながら、その月の最初の日には、念入りに氏神様への参拝に出掛けるついでに詣(もろで)がよく行われるのも、そうした気持ちから。

なかでも、元旦(がんだん)は特に念入りになり、氏神様から始めて七社参りが行われることが多い。三社、五社でもよいのに、出来れば七社をというのは、七福神にでもあやかっているのか定かではない。

(石野 瑠一＝尾張町若手会)

夜の備え

「早起きは三文の得」といわれるように、商家の朝は早い。人一番早く起きて、まず仏壇のご先祖様に手を合わせ、続いて神棚に手を合わせる。今朝も何事もなく迎えられることに感謝する気持ちで、神仏への敬意(けいけん)な態度となる。

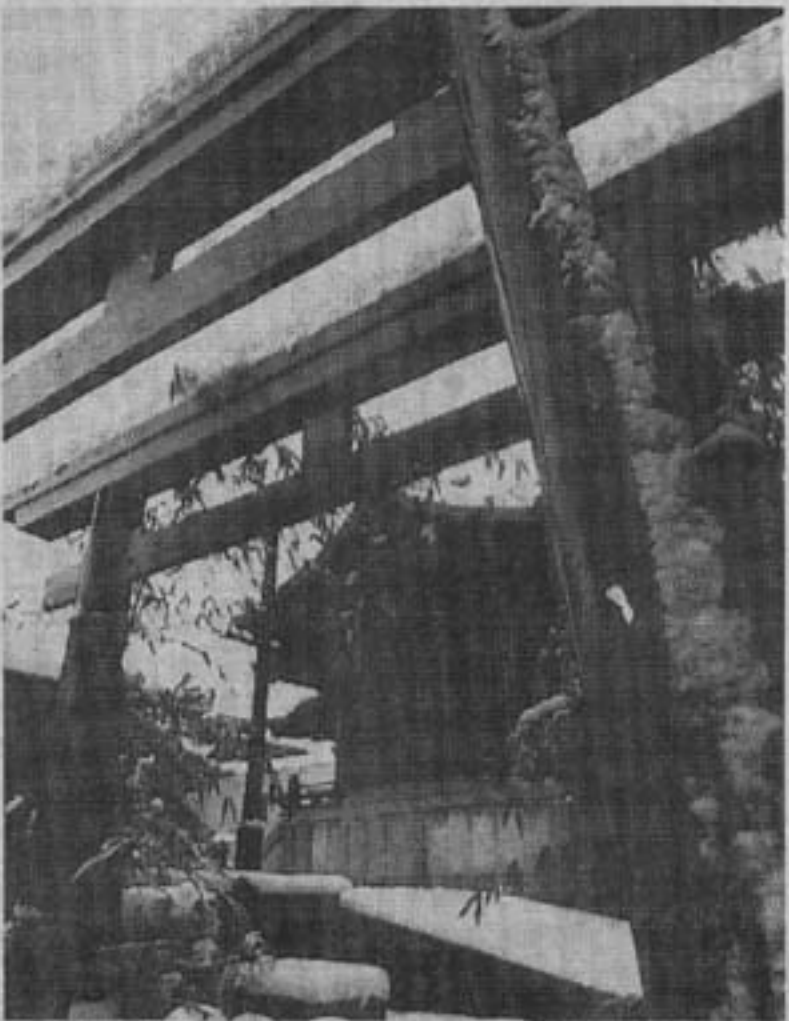
ついこの前までは、夜の寝しなに必ずご飯を残して寝たものだ。たまたまご飯が残っていなかったら、新たに炊いてまでしておひひに残して置いた。

なにが事あるかもしれない。絶対安心というものはないから、もしものときに備えて当座の食べ物だけは置いておく。今のような鉄筋の建物もなく、木と紙と土だけの家では、いつ火事が起こっても不思議ではない。

「加賀藩史料」という歴史書を読んで、火事の記録ばかりが書いてある。世に有名な加賀藩(とび)も、いち早く組織的に火事に備えた加賀藩の産物なのだから。

もっと先の時代の古巻では、「石川下(お城の近場)で商売させてもろるんだから、お殿様が江戸の徳川家といさかいに

もしもの時にと 食べ物残し寝た



久保市神社

旧久保市村は尾張町の前身。康土神(うぶすながみ)としての信仰は現在も厚い